「日々の理科」（第 1072 号） 2017（H29),-6,13

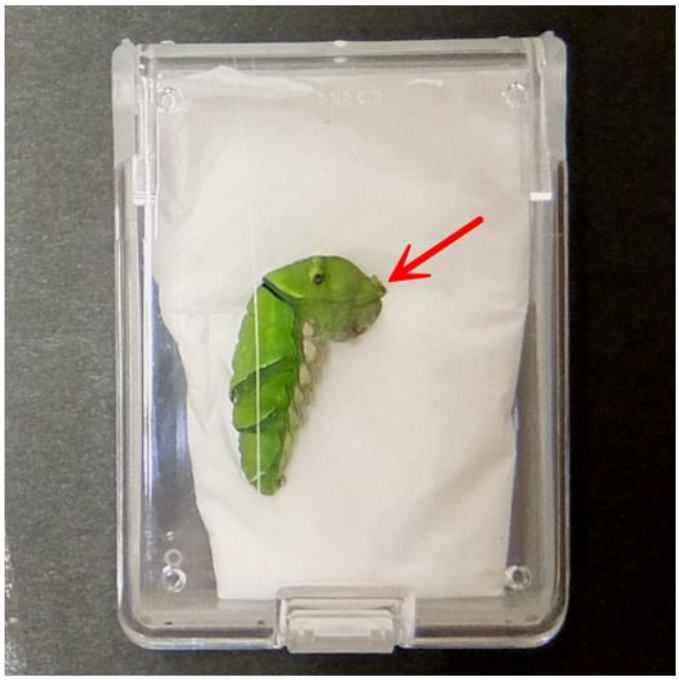
「サナギから羽化へ（２）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

先日の掃除の時間、子どもたちがまた人垣をつくってあーだこーだ言っている。こういう場合、大抵は昆虫が一枚噛んでいることが多い。

騒ぎの正体は、ナミアゲハの前蛹（ぜんよう）であった。前蛹というのは、終齢幼虫の最後の姿で、幼虫のままサナギの格好をしている状態である。あと一回脱皮して、正式にサナギになる。

しかしこのアゲハの幼虫は、子どもの学習机の脚で前蛹化してしまい、掃除中に何らかの拍子に、落下してしまったらしい。完全にサナギになっていれば、全体的に硬く、落下しても無事なことが多い。しかし前蛹は、あくまで終齢幼虫の最後の姿で、まだ柔らかい。落下したら救いようがないのだ。幼虫に戻って、もう一度ぶら下がることもできないし、脱皮も難しい。



完全に蛹化するまでは少し猶予があるので、私は、とりあえず透明ケース（画鋲の箱）に落ちた前蛹を入れて、子どもたちに観察させることにした。落下時の衝撃か、何かが当たったのか、←の部分から体液が漏出してしまっている。机の持ち主の女児は、「持って帰って看病する」と言っていたが、看病のしようもないし、動かすこと自体危険だ。

脱皮、蛹化は絶望的で、前蛹のまま息絶えると思われた。しかし翌朝見ると、驚いたことに、こんな状態でも脱皮を試み、一応サナギの姿になっていた。だが、体液の漏出が激しく、羽化は難しいだろう。